



ピロリ菌除菌後の胃がん検診

ピロリ菌 と 胃がん の関係

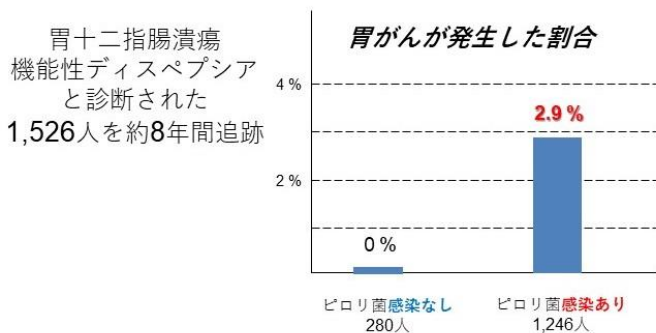
Helicobacter pylori (ピロリ菌) と胃がんには、深い関係があります。1994年にWHO(世界保健機関)は、ピロリ菌を「確実な発がん因子」と認定しました。ピロリ菌による慢性胃炎が数十年単位で持続すると胃の粘膜が萎縮し、胃がんを引き起こしやすい状態に陥ります。(図1参照)

(しかしながら、ピロリ菌感染のすべてが胃がんになるわけではありません。)

そしてピロリ菌感染を背景とした胃がんは、世界の中でもアジアでその70~80%が発生し、中でも日本、中国といった東アジアが、好発地帯となっています。(図2参照)

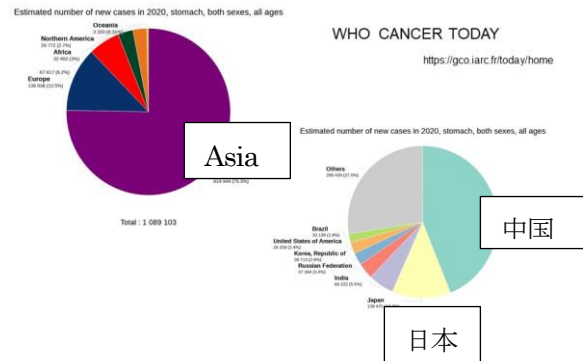
そこで、日本では、胃がん発生を抑制する目的で、2013年に「ピロリ菌除菌治療」が保険適応となりました。現在、国内では1年間に約150万人が除菌治療を受けています。

図1 ピロリ菌感染による胃がんの発生



胃十二指腸潰瘍
機能性ディスペプシア
と診断された
1,526人を約8年間追跡

図2 世界における胃がんの好発地域 2020



文献： N Eng J Med 2001; 345(11), 784-789

出典： Cancer today <https://gco.iarc.fr/today/home>

ピロリ菌 除菌治療の実際

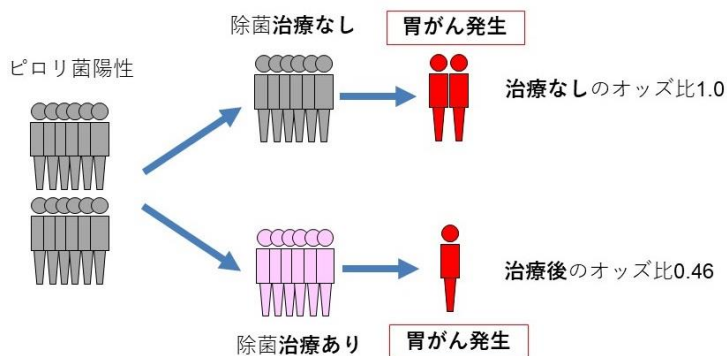


保険診療によるピロリ菌除菌治療は、1種類の抗潰瘍剤(胃酸を抑える薬)と2種類の抗菌剤(細菌に対する薬)の3剤を服用します。1日2回、7日間連続で内服します。正しく薬を服用すると、約90%の方で除菌成功が期待されます。

薬を飲み終わって、2~3カ月経過したら再度、ピロリ菌の検査を受けて、除菌が成功したかを確認してください。(除菌の効果判定)

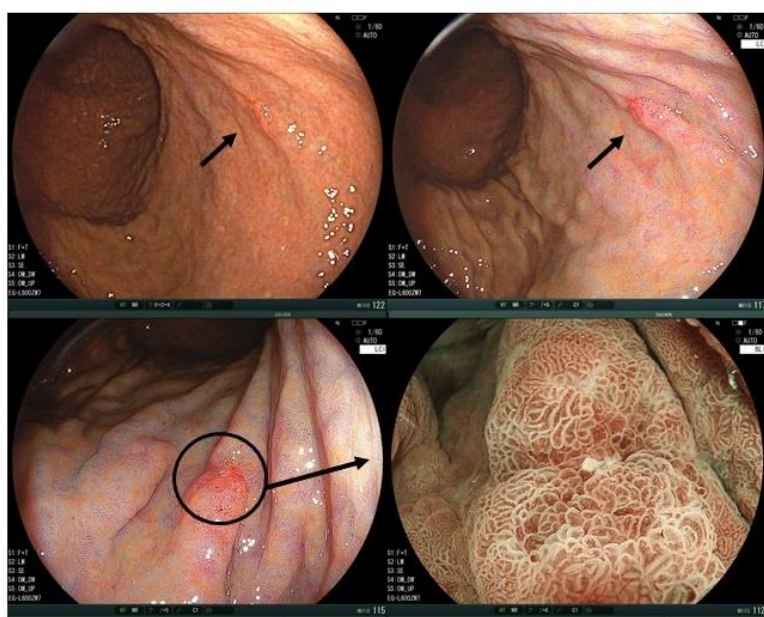
ピロリ菌 除菌治療による胃がん予防効果

世界中で発表された、ピロリ除菌治療による胃がん抑制効果を検証したデータによると、ピロリ菌陽性の方が無治療で胃がんを発生する割合（オッズ比）を1と仮定すると、ピロリ菌除菌治療を受けた方は胃がん発生の割合が0.46まで低下すると報告されています。（出典 Gastric Cancer 22 435-445; 2019）つまり、ピロリ菌除菌治療は胃がんの発生を約半分に減少させることができます。



ピロリ除菌治療は、胃がんの発生率を半減させますが、0にはできません。除菌治療後も、年に1回の内視鏡検診を続けてください。

ピロリ菌の除菌治療後に発見される 胃がん



ピロリ菌の除菌治療で、胃がん発生の危険性が下がることは確かですが、除菌成功後にも胃がんが発見されることがあります。特に除菌治療前、すでに胃の粘膜萎縮が進行していた方は、除菌後も胃がんのリスクが残ります。

除菌後も、1年毎を目安に定期的に内視鏡検診をお受けください。

除菌治療後に発見された早期胃がん（上段；矢印、下段；左画像の丸内の拡大が右画像）

健康診断のご予約やご相談は、Tel.03-3668-6806 へご連絡ください。



今後もニュースレターを発行し、皆様の健康管理に少しでも参考になればと思います。ぜひ皆様からのご意見、ご感想をお寄せください。今後もこのニュースレターやホームページ等を通じ、役立つ情報を発信してまいります。今後ともよろしくお願いいたします。

公益財団法人早期胃癌検診協会 事務局
Tel.03-3668-6803/E-mail:mail@soiken.or.jp